

いわさき だいすけ
一般教育分野 講師 岩崎 大輔

『思想のドラマトルギー』

林達夫、久野収著

平凡社（1993年）

今回一冊を選ぶにあたって非常に悩みました。その際気がついたのは、E・R・クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』、E・アウエルバッハ『世界文学の文献学』、マリオ・プラーツ『綺想主義研究』など、私が迷ったものはどれも、哲学から文学、美術や科学など膨大な知識を有し、古典ギリシア語やラテン語はもちろん英独仏伊西露など複数の言語をやすやすと読み解く「一人の」人物が記した著作ということでした。本書は対話篇ですがそのような一冊です。



この本を手にしたのは恐らく学部生か修士課程の頃だと思います。対話形式で書かれていて読みやすそうだったくらいで、この時は「知の巨人」林達夫の名前はまだ知りませんでした。読み始めてすぐに打ちのめされました。その膨大な読書歴、知識量と、それを人と討論できるだけの消化ぶりについて

です。なんとなく知っている、聞いたことがある、程度の聞きかじりではこのような対話は成立しません。

久野が合いの手を入れるような形で林の幼少時からの知の遍歴が語られていくのですが、哲学や文学作品の話だけでなく、話題は歌舞伎や映画、役者にまで及び、さらに様々な著名な人物との個人的な交流までが披瀝されます。学生身分で読んだときは（実は今も）知らない名前や著作が多々登場し、いったいどうやらこれだけの量の書物に精通することができるのか、昔の大学生というのはこれほど勉強するものなのか、と圧倒されました。そのすごさは巻末の人名索引と作品名索引を見るだけでわかります。

インターネットで誰でも容易に情報にアクセスできる現在と異なり、以前は何でも知っている人物を指して「生き字引」のように形容することがありました。このように該博な知識を有することはかつて教養主義と批判されたこともあります（実際林は大正教養主義を継承する、百科全書派などとも呼ばれることもあります）、広く深く自分のものとしている場合には批判される要素は見当たりません。現在はスマホやツイッター、SNSなどの影響で200字以上の文章になるとなかなか読んでももらえないそうです。そのような中で一度はこのような浩瀚な著作を読破することに挑戦してほしいと思います。「一生勉強が続く」という言葉の意味を実感できると思います。

はせがわ いくみ
事務局 教務課 長谷川 育実

『喜嶋先生の静かな世界 The Silent World of Dr. Kishima』

森博嗣著

講談社文庫（2013年）

この本は、著者である森博嗣さんの自伝的小説といわれています。大人になった主人公 橋場君が、喜嶋先生との出会いを中心に、これまでの人生を振り返るといふストーリー展開です。喜嶋先生は理系学部の大学の助手として登場するため、物語の多くは主人公の学部・大学院時代の描写となっています。学生の皆さん、また教職員の方々にも、共感していただける部分が多いのではないかと思います、こちらをお薦めの一冊としました。



主人公の橋場君は、入試を突破し希望した大学へ進学しますが、単調な授業や生活に徐々に失望してしまいます。そんな中迎えた4年生の研究室配属。選考がないからという理由で、とある研究室を選んだ橋場君ですが、この研究室での喜嶋先生との出会いをきっかけに、研究の楽しさを知り、没頭していきます。その後の橋場君がどのように過ごしていくのかは、ぜひご自身で確認していただければと思います。

主人公の学生時代がリアルに描写されており、お芝居や映画のような劇的な展開はありません。ですが、新たな生活への期待や失望、好きなものに一心に取り組む楽しさなど、誰もが経験したことがあるであろう出来事や心情が描かれており、自分と重ねながら読むことができる本だと思います。読み終わった後には、何かを学ぶことが楽しく・魅力的に見えてくるかもしれません。

私は社会人になってから、この本に出会いました。学生の頃に読んでいたなら、もう少し充実した学生生活を送ろうと努力したかも…と悔しく思います。勉強・研究・仕事の合間のひと時に、一度手にとっていただければ嬉しいです。